

夢追いかけて

2009年 ブルーレイ カラー 127分 インドネシア 日本語・英語字幕付き

監督：リリ・リザ

製作：ミラ・レスマナ

脚本：サルマン・アリスト

ミラ・レスマナ

リリ・リザ

撮影：グンナル・ニムプロ

音楽：ティティ&アクサン・シュマン

出演：レンディ・アフマド

アズウィル・フィトゥリアント

フィクリ・セプティアワン

ルクマン・サルディ

※ブルーレイ・ディスクは35ミリプリントからテレシネにより作成したものです。日本語字幕が見つらい箇所があります。ご了承ください。

(物語)

1980年、インドネシア・ブリトン島。スズ鉱山で働く労働者家庭の息子イカルは、家族、そしていとこのアライと共に暮らしていた。アライは、父を亡くし孤児となった苦難にも屈しない、常に前向きで明るい少年。二人は強い信頼関係で結ばれ成長し、5年後、地元ガントンを離れ、共にマンガルの公立高校に進学する。そこで新たな友ジンプロンに出会い意気投合する。温厚な性格で馬をこよなく愛するジンプロンは、両親を亡くして以来吃音が出るようになっていたが、三人は充実した高校生活を送り、青春を謳歌していた。

イカルは、若く情熱溢れるバリア先生から文才を評価され、作家を志す。そして先生の影響を受け、アライと共にパリ・ソルボンヌへの留学を目指すことに。ジャカルタ大学に進学し、その後渡仏するという大きな夢の実現に向けて、アルバイトと勉強に励み、イカルとアライは優秀な成績を修める。

そんな中、スズの相場が暴落し、島の経済を支えていたスズ公社が倒産したため、精製所勤務の父は失業してしまう。苦境でも笑顔と誇りを失わず働き続けた父を敬う二人は、アルバイトで蓄えた貯金を母に差し出す。しかしイカルは夢や希望を見失い、学校にも通わずに港で日雇いの仕事を始めてしまう。悩み挫折するイカルだが、高校の老教師に厳しく諭されて心機一転し、なんとか復学する。高校の成績表授与式を終えたイカルは、長年の期待を裏切り失望させてしまったことを涙ながらに父に詫げる。父はそんな息子を叱責することなく、ただ無言のうちに受け入れ、許す。

その後、夢を諦めないアライを中心に、三人はさらに友情と結束を強めていく。無事高校を卒業すると、イカルとアライは名門インドネシア大学への入学を目指して島を離れ、ボゴ

ールにたどり着き、受験勉強とアルバイトに奔走する新生活を始める。

リリ・リザ監督メッセージ

私がよく思うのは、アジアが地球村という世界の中で最大の課題に直面しているということです。すべてのものがあまりにも一般的になってしまい、私たちは自分のアイデンティティーから自由になりつつあります。また同時に、なにもかも大衆紙やテレビや映画などのメディアが伝えるとおりに見方に慣れきってしまっています。しかし私たちが自分たちの時代の現実をメディアの中に見ることは、ほとんどありません。また時間に追われて生活しているために、他の人々とゆっくり時間をかけて交流する機会は、ますます少なくなってきました。お互いの交流は限られてきており、映画でさえ非常に慌ただしい作品が作られるようになってきたのです。

私が「夢追いかけて」の製作のためにブリトン島へ戻ったのも、部分的にはそういった理由があったからです。「虹の兵士たち」の成功のおかげで島へ戻る格好の機会を得ることができたのでした。島では海風の音を聞き、私のような人間がジャカルタではめったに経験できない時間の流れを感じることができました。そして私はもう一度、その時間の流れを映画というメディアで再表現しようと努めました。

「夢追いかけて」は表面的には青春映画です。若者たちの自分探しの物語であり、もちろん恋愛シーンもちりばめられており、十代が普通に抱える問題も描いています。しかし私にとってのこの作品は、社会的不平等や不公正な富の分配を描いたものでもありました。これらが私の愛するインドネシアにおいて、アチェからパプアにまで至る全土で頻繁に発生している問題なのです。

私は再びブリトン島の新人たちと一緒に楽しく仕事をすることができました。彼らはまるでプロの俳優のように、すばやく状況に適応していました。フィクリ・セプティアワン（イカル）、レンディ・アフマド（アライ）、アズウィル・フィットウリアント（ジンプロン）などの新人たちです。また経験豊富なインドネシアの俳優たちとも一緒でした。マチアス・ムッチョス、リエケ・ダヤ・ピタロカ、ランドウン・シマトゥパン、ヌギエ、ルクマン・サルディなどです。

「夢追いかけて」は、様々な視覚的音声的可能性をためす余地を私に与えてくれました。今回の作品では、私たちが「虹の兵士たち」で初めて見たブリトン島の美しい風景とともに、それを補うかのように描かれたのが、港町マンガ

ールの雑踏と、そのユニークな特徴でした。数多くのシーンをこの暑い港の狭苦しいドックで撮影しました。それはダイナミックでユーモアに満ちあふれたシーンで、いつも走り回っている3人の少年の熱意に彩られたシーンとなりました。いつも自然は驚くほど神秘的な時間の流れとエネルギーを私たちに示してくれます。それこそ私が映画の中に表現したいと願ったものでした。

イカル、アライ、ジンプロンの物語は、夢を持つことは家を建てることに似ているということを私に思い起させてくれました。最初の土台づくりから最後の細かい仕上げまで、どちらも準備と計画が必要なのです。

「夢追いかけて」で、私は父親と子供の素晴らしく美しい親子関係を感じました。それは原作者のアンドレア・ヒラタ氏が自分の体験にもとづいて慎重に取り上げ語ったものでした。私はそれこそがこの地域から発信して世界の他の地域の人々と共有できるものだ と確信しています。人を愛することは純粋で素朴だということを、多くの言葉を使わずに共有できると私は感じています。ただ世界の動きは速すぎて、私たちの声は受け止めてもらえないかもしれませんが。

2010年 リリ・リザ

(アジアフォーカス・福岡国際映画祭カタログより)